Kansai Nikikai Opera

Feb.2020

関西二期会 第 91 回オペラ公演『フィガロの結婚』（2019 年）撮影：早川嘉雄

Contents

2.3 『リゴレット』 作品解説
4.5 指揮者・演出家が語る『リゴレット』
6.7.8 美しく情熱的な音楽を表現するオペラ歌手たち
周防彩子 / 細川勝 / 松浦優 / 馬場清孝 / 片桐直樹
9 コンサートレビュー
関西二期会 第 91 回オペラ公演 『フィガロの結婚』
10 谷やんの企画・制作デイリーライフ
11 オペラ座の凡人 / 賛助会員
12 新入会員の紹介 / コンサートスケジュール

公益社団法人 関西二期会

Giuseppe Verdi

Rigoletto

愛する娘ジルダを巡る
宮廷道化師リゴレットの復讐と呪いの物語

巨匠ヴェルディ中期の傑作

関西二期会の第 93 回オペラ公演はジュゼッペ・ヴェルディ（1813-1901）の中期三大傑作の最初を飾る『リゴレット』をお届けします。それまですでに 14 作品（他に 2 本の改作）を発表し作曲家としての評価を固めていたヴェルディですが、38 歳の時に書き上げたこの『リゴレット』と 2 年後の『イル・トロヴァトーレ』の成功によって国民的なオペラ作家としての地位を獲得するのです（続く『椿姫』の初演は今日の評価とは逆に大失敗でした）。フランスの作家ビクトル・ユーゴーの戯曲『王は愉しむ』を原作に、物語は宮廷道化師のリゴレット、その娘で美しく純真無垢なジルダ、そして好色なマントヴァ公爵の運命を描き出します。マントヴァ公爵のカンツォーネ「女心の歌」は、このオペラを代表する 1 曲としてあまりにも有名です。

『リゴレット』（2020 年、アミントーレ・ガッリ歌劇場にて撮影）

理想の台本を求めて

1850 年 4 月、ヴェルディはヴェネツィアのフェニーチェ歌劇場と新作オペラ発表の契約を結びます。台本を受け持ったのはヴェルディ作品中 9 作を手がけた、歌劇場の座付き作家フランチェスコ・マリア・ピアーヴェ (1810-1876) でした。この時期ヴェルディは『ナブッコ』などに見られる初期の愛国的な作風から脱して、より人間の心理や性格描写に重点を置いたオペラを目指していました。彼は過激なロマン派作家として知られていたユーゴーの『王は愉しむ』が理想の台本になると考え、これをオペラ化するべくピアーヴェに直ちに原作を手に入れてヴェネツィア当局との交渉を進めるよう指示します。というのも『王は愉しむ』は 16 世紀のフランス国王、フランソワ 1 世の享楽の犠牲となる宮廷道化師トリブレとその娘の運命を描いた作品で、1832 年の初演以来パリで上演禁止となっていたからです。当初は問題ないかに見えたヴェネツィアでの上演に、影がさし始めたのが 8 月。そして 10 月にはほとんど完成していた台本が 12 月上旬になって当局に却下されます。上演を危ぶんだ劇場側とピアーヴェは設定の変更をヴェルディに提案しますが、作品の本質を損なうとしてヴェルディはこれを拒否。検閲と作曲家の板ばさみの中でピアーヴェは交渉を重ね、その年の暮れも押し迫る頃、ようやく当局の譲歩を引き出したのです。最大の条件は「物語の舞台と登場人物を王政下のフランスから変更すること」。これをもとに設定は 16 世紀北イタリアのマントヴァに移され、フランソワ 1 世はマントヴァ公爵に、宮廷道化師トリブレはリゴレットへと変更されました。翌 1851 年 3 月 11 日の初演はヴェネツィアを熱狂させる大成功であったと伝えられます。

『リゴレット』（2020 年、アミントーレ・ガッリ歌劇場にて撮影）

リゴレット

マントヴァ公爵の城。宮廷道化師リゴレットは公爵を楽しませるために、いつも辛らつな言葉で人を傷つけ、廷臣たちの恨みを買っていました。一方公爵の好色は留まるところを知らず、今日もチェプラーノの伯爵夫人を夫の目の前で誘惑する始末。そこへ娘を公爵に弄ばれたモンテローネ伯爵が現れ公爵を激しく非難します。そしてその怒りを冷笑するリゴレットに向かって「父親の苦悩を笑うものこそ呪われよ」と呪いの言葉を口にするのでした。リゴレットには世間から隠して育てた娘がありました。美しく成長した彼女－ジルダと過ごす時間こそ最良のひと時。モンテローネの呪いを気に掛けつつも、彼はその清純な姿に安らぎを覚えるのでした。ところがジルダはすでにマントヴァ公爵と出会っていました。身分を偽ってジルダのもとに忍んで来る公爵。初めての恋に陶然とするジルダ。さらにリゴレットに恨みを持つ廷臣たちが、彼女をリゴレットの愛人と勘違いして城へと誘拐してしまいます。事情を知ったリゴレットが城へ着いたのはジルダが公爵に弄ばれた後でした。道化としての自分をかなぐり捨てて、復讐を誓うリゴレット。しかし殺し屋スパラフチーレに公爵の殺害を依頼した時から、彼ら父娘の運命は大きく狂い始めるのです。

ドラマと音楽が一体となったオペラ

この作品でヴェルディが創造したのはドラマと音楽の融合でした。彼以前のロマン派オペラが歌手の技巧や力量を示すことに重点を置いていたのに対し、歌や音楽が物語とより緊密に結びついたオペラを創り上げたのです。マントヴァ公爵の歌う「あれかこれか」「女心の歌」、ジルダの歌う「慕わしき名よ」そしてリゴレットの歌う「悪魔め、鬼め」などの歌曲に加えて、重唱の素晴らしさも作品を魅力的なものにしています。特に第 3 幕で公爵とマッダレーナ、リゴレットとジルダの、それぞれに異なる思惑を描き出す四重唱「美しい恋の娘よ」はオペラ史上の傑作のひとつ。物語と歌が渾然となったヴェルディ作品ならではの聴きどころと言えるでしょう。なお今回はイタリア、アミントーレ・ガッリ歌劇場、ポリテアーマ・グレーコ歌劇場と関西二期会が同じ演出、衣裳、装置で臨む共同公演。パオロ・パニッツァの演出のもと、ジルダ役の周防彩子はすでにアミントーレ・ガッリ歌劇場で同役を歌い、その成果を携えての登場となります。指揮にアルド・サルヴァーニョ、そして管弦楽に大阪交響楽団を迎えて贈る『リゴレット』。力強い歌唱と重厚な展開にご期待ください。

（音楽ライター：逢坂聖也）

公演情報　『リゴレット』
<全 3 幕　イタリア語上演・字幕付>

指　　揮：Aldo Salvagno（アルド・サルヴァーニョ）
演　　出：Paolo Panizza（パオロ・パニッツァ）
管 弦 楽：大阪交響楽団

公演日程：2020 年 6 月 20 日 (土) 16:00 開演
2020 年 6 月 21 日 (日) 14:00 開演

公演会場：東大阪市文化創造館 Dream House 大ホール

6/20（土）		6/21（日）
大谷 圭介	リゴレット	細川 勝
周防 彩子	ジルダ	松浦 優
瀬田 雅巳	マントヴァ公爵	馬場 清孝
萬田 一樹	スパラフチーレ	片桐 直樹
古田 昌子	マッダレーナ	井上 美和
萩原 泰介	モンテローネ伯爵	伊藤 正
髙岡 友美	ジョヴァンナ	岸畑 真由子
鳥山 浩詩	マルッロ	谷本 尚隆
藤田 大輔	ボルサ	しまふく 羊太
近藤 修平（客演）	チェプラーノ伯爵	中野 嘉章
森井 美貴	チェプラーノ伯爵夫人	立塚 夢子
服部 英生	牢番	神田 行雄
味岡 真紀子	小姓	近藤 麻帆

お問い合わせ　関西二期会チケットセンター　06-6360-4651

指揮者・演出家が語る『リゴレット』

ヴェルディ作曲《リゴレット》は、イタリア語に訳すと『愛のすべて』。このオペラで歌われる名曲には、人生で巻き起こる人間の喜びや悲しみ、善と悪といった感情が彩られ、人を愛することについて考えさせてくれる。1851 年にヴェネツィアで初演されて以来、約 170 年経った今日でも私たちの心を捉えて離さない。この名作オペラのタクトを振るのは、イタリアのサレルノ出身で、これまで日本を含め 50 演目以上のオペラに携わってきたアルド・サルヴァーニョ氏。演出は、第 92 回オペラ公演に引き続き、イタリアのヴェローナ出身のパオロ・パニッツァ氏が手掛ける。オペラ《リゴレット》の魅力を二人に聞いた。

指揮者
アルド・サルヴァーニョ

リゴレット、ジルダ、マントヴァ公爵

リゴレットは背中の曲がった道化師。娘ジルダには自分の職業を隠し、父親としての愛情から娘を家に閉じ込めている。マントヴァ公爵は権力をふりかざし、次から次へと女性を手玉にとる享楽家。パニッツァ氏は「リゴレットには悪の部分と父親としての善の部分という二面性があり、それは人間味があるということです。彼にとって娘ジルダの存在はすべて。ジルダは、生き続けることに対して不安を感じているのだと思います。バイオレンスに閉じ込めているのではなく、父親の愛情で彼女を隠していることが分かるように、今回の演出では、家にたくさんの庭を作りました。最終的に、彼女の不安は的中して危ない目にあうわけですが、公爵を許す第3幕からは、彼女の純粋さを改めて感じます」と、リゴレットとジルダの人物像を語る。

純粋なジルダをもてあそんだマントヴァ公爵だが、パニッツァ氏は「第 2 幕の公爵のアリア〈あの娘がさらわれてしまった！〉で歌われるように、同時に色んな女性を好きになりながらも、ジルダに恋したということは本当なのでしょう。ただ、しばらく彼女に会えないとなったら、すべてを忘れてしまう。それが彼の女癖の悪さですね」と語った。

呪いの言葉

このオペラのテーマは、“呪い”だ。好色なマントヴァ公爵がモンテローネ伯爵の娘をたぶらかし、公爵に怒りをぶつける伯爵に対して、道化師リゴレットは伯爵を笑いものに。怒った伯爵は呪いの言葉を浴びせ、リゴレットは呪いに翻弄されていく。「リゴレットが人を馬鹿にすることで人が傷つき、廷臣たちが彼を傷つけようとして娘をさらって、最終的に彼は復讐をしようとして娘が殺されてしまう。呪いとは人の言動によって生まれるものだと思っています」と、

パニッツァ氏は呪いの言葉が暗示することを語った。それは、リゴレットに限らずに私たち自身にも置き換えることができる。

名曲が散りばめられたオペラ

リゴレットは名曲揃いのオペラ。人間の様々な感情をドラマティックに奏でて、観客は音楽のうねりの中に惹き込まれる。

第３幕でマントヴァ公爵が歌う＜女心の歌＞は、世界中で愛され続けているが、サルヴァーニョ氏はこの曲から公爵について次のように分析する。「一見、公爵の真実の姿を見せる軽薄な曲に聴こえます。しかし、彼自身は軽薄というよりも自由人なのです」。ヴェネツィアでの初演前に、本番まで隠されていた歌だったが、美しい旋律ゆえに開演前には広まってしまったという。

マントヴァ公爵に恋するジルダのアリア＜慕わしいお名前が＞は、コロラトゥーラ技法を散りばめられ、恋に恋する胸の高鳴りが表されている。

第２幕のリゴレットのアリア〈悪魔め、鬼め〉は、娘をさらわれた父親の怒りと悲しみが歌われた力強い歌だ。パニッツァ氏は「リゴレットが初めて周りの人たちの前で道化の仮面を外して、一人の男として歌い、彼が自由に発言するという素晴らしいシーンです」と注目する。

サルヴァーニョ氏が特にヴェルディならではと感じる場面は、第３幕の四重唱だと言う。マントヴァ公爵とマッダレーナは幸せそうに歌い、リゴレットとジルダは絶望に打ちのめされている。「これぞ作曲家の演劇的な仕掛け技」と、ヴェルディの見事な技法について語った。

物語のメッセージ

《リゴレット》を通して、本当に人を愛することや尊重することはどういうことなのかを考えさせられる。パニッツァ氏は、「善や悪とは何か、

演出家
パオロ・パニッツァ

愛とは何か。まさにそれを考えさせるために、ヴェルディはこのオペラを作ったのではないかと思います。人生で起きる出来事をすべて詰め込んでいるオペラです」と力を込める。

サルヴァーニョ氏は、客席に届けたいことを次のように述べた。「オペラの作曲家たちが目指しているものは、観客の心と記憶に残る作品を残すこと。観客が登場人物と、涙と笑いと愛を共有することだと思います。そして観劇後に劇場を出て、お客様がオペラを通して人間の価値を見出せたときに、作曲家たちの課題が果たされるのです」。

ドラマティックな物語と音楽に惹き込まれた時、私たちは時空間を超えてヴェルディの力強い魂に包まれ、物語のメッセージと自身の人生を重ね合わせるのだ。

（インタビュー：金子真由）

美しく情熱的な音楽を表現するオペラ歌手たち

周防 彩子

ジルダ役（20 日）

今回の《リゴレット》の上演は、イタリアのポリテアーマ・グレーコ歌劇場、アミントーレ・ガッリ歌劇場、関西二期会の共同公演で、ジルダ役の周防彩子さんは 1 月 3 日にガッリ歌劇場の舞台に立った。本場イタリアでの貴重な体験を伺った。

ガッリ歌劇場のあるリミニはアドリア海に面し、夏はリゾート地として人気のある都市だ。同歌劇場は、第二次世界大戦の戦火で破壊されたが、2 年前に昔の姿のまま建て直された。周防さんは「客席からみる馬蹄形の建物は本当に壮麗で感動しました。昔のものをそのまま維持することがイタリアでは大事なんだと思いました」と振り返る。

稽古から本番まで、イタリアと日本の文化の違いを感じ続ける毎日だった。「予定表があっても予定通りにいかない。本番では、予想しないところで幕が上がったので即興で演技し、本物の火を使ったランタンがだんだん熱くなってきて、『熱い熱い！』となりながら演じていました。日本では色々なことに気を使って作られていると思いました」と笑顔を見せる。

イタリアでは、オペラが『生き物』

パニッツァ氏の演出は自由度が高く、オペラ歌手がアイデアを出し、そのまま使われたり駄目出しされたりしながら作られていく。臨機応変さが求められる現場だ。「オペラが作曲された当時は、作曲家が書き終わると歌手に渡して、歌手は必死に覚える。当時と同じような感覚で、イタリアではオペラが作られていて、まるでオペラが『生き物』のようでした」。

リミニでの 3 日間の公演は、すべて完売。客席からは温かい拍手とブラボーが巻き起こった。同行した米田哲二理事長は、「最初はドキドキしながら観ていましたが、本当に素晴らしい演奏だった。関西二期会との共同公演と場内放送されており、歩いて帰るときに『良かった、良かった』とあちこちから褒められました」とほほ笑み、斉藤言子副理事長は、「お客さんが『我が町のオペラ』と誇りに思っていて、その空気感が一体化しているのを感じました。色彩が赤も青もグリーンも深い色で、道具や衣裳はそこで培われた色合いや深みが大事だと思いました」と伝統が反映された舞台について語った。

イタリアで一回り成長した周防彩子が、再びジルダを演じる。「イタリアで鍛えていただいた臨機応変さと対応力を活かしたい思います」。大阪でも、生きたオペラがやってくる。

（インタビュー：金子真由）

※公演写真：『リゴレット』（2020 年、アミントーレ・ガッリ歌劇場にて撮影）　※本文右：同歌劇場でのプログラムの表紙

ヴェルディの音楽に 歌と心を乗せて

細川 勝

リゴレット役（21 日）

30年ごし 憧れのタイトルロールに挑む

――歌はいつ頃から歌われていたのですか。

堺市生まれの堺市育ちで、堺市の少年少女合唱団に入り、ずっと歌い続けてきました。大学に入って、ヴェルディの作品に非常に惹かれました。ただ若い頃は、声があまり出なくて、自分の声が出来あがってから演じたい気持ちがありました。年齢を重ねるうちに声が出るようになり、50歳をすぎて、少し自信を持てるようになりました。今の自分がどんな風にリゴレットを歌えるのか、すごく楽しみに思っています。

――『リゴレット』は、名場面がたくさんあります。

一番好きな箇所は、1 幕のリゴレットと娘ジルダとの二重唱。リゴレット役はフォルテの印象が強いですが、ピアノ（弱い）でのフレージングを繋いでいければ、この二重唱は、私自身の特色を出し、他にないリゴレットをお聴かせできるのではと思います。

――ジルダへの愛情をどう感じられますか。

私にも二人の娘がおりますが、リゴレットの娘に対する愛情は共感できます。リゴレットは、道化を決して好きでやっているのでなく、身体にハンデがある中で、生きていく上での処世術だった。それは全て、ジルダを育てていくという目的だと思いたいです。

――どんなリゴレットを演じたいですか。

ごくごく普通の父親を演じたいです。子どもが誘拐されたり、事故が起きたりなど痛ましい事件がありますが、もし愛する存在を急に失った場合、自分はどこまで正気でいられるか想像がつかないです。ヴェルディの作品の中で、一番激情型の作品なので、演じながら正気を失ってはいけない。全身全霊をかけて演じさせて頂いて、お客様に何かしら感じていただければ有難いです。

松浦 優

ジルダ役（21 日）

可憐な少女役を演じ 大好きな音楽の世界で羽ばたく

――小さい頃から歌われていたのですか。

ピアノを習っており、音楽が好きで歌うことも大好きでした。中学の文化祭などで演じることが楽しいなと思っていましたが、高校３年生まで陸上部だったので、遠い世界のようなイメージを持っていました。幅跳びでは（熊本の）県大会で３位に入ったことも。高校の授業で音楽の先生から「音楽が好きならどう？」と勧められて、音楽大学に入りました。

――愛する人の身代わりになるジルダの心境を思うと、胸が痛くなります。

若い時は、親の言うことを聞かずに突っ走るところがあるじゃないですか。自分が愛したことを貫きたいという感じですね。怖いもの知らずで、それが正義と信じて疑わない。外の世界を一緒に見て、止めてくれる、お母さんのような存在が必要だったと思います。

――ヴェルディの音楽をどんな風に歌いたいですか。

ジルダとマントヴァ公爵の愛の二重唱は、恋に恋して夢見ている感じもあるのですが、音楽は激しくて、乙女が歌っているような音型ではありません。恋する可憐さを残しながら歌いたいです。その後に続くジルダのアリアは、胸の高鳴りが休符によって表されていて、いかに途切れず、恋のときめきを伝えられるのかが難しい課題です。

――お客様にどんなところを見てもらいたいでしょうか。

サバサバと男勝りな性格なので、ちゃんと可憐に演じたいです。純粋可憐なだけでなく、どこか芯のあるところも。ヴェルディの音楽は心情を表し、全てを物語っているので、どれだけ本当に楽譜と向き合っていけるか…。そのまま演じられたら必ず伝わると思います。

馬場 清孝

マントヴァ公爵役（21日）

マントヴァ公爵を歌えることが嬉しくて仕方がない

――どんな少年時代を過ごされていましたか

田んぼに囲まれた丹波篠山で育って、小学校まで大きな声で歌いながら、30分くらい歩いて学校まで通っていました。高校生の時、校歌を歌う試験があり、それを聞いた音楽の先生から誘われて、同じ高校の先輩で声楽家の畑儀文先生の元へ通うようになりました。

――『リゴレット』にまつわる思い出はありますか。

数あるオペラの中でも一番好きなオペラで、音楽に重厚感があって、心に入ってきやすい。大学院生の時に、アルフレード・クラウスがマントヴァ公爵を歌っているCDを聴いてからずっと好きです。オーケストラの演奏で、マントヴァ公爵を歌えることが嬉しくて仕方がないです。

――名アリア“女心の歌”の歌詞の内容は女心の軽薄さを歌っていますが、実はマントヴァ公爵そのものですよね。

それを分かっていて、マントヴァ公爵は歌っているのではないでしょうか。自由奔放に生きて、自己中心的だから。誰に対しても優しく受け入れるけれど、愛情は深くない。それがジルダを翻弄させていくのでしょうね。屈託のない明るさで演じられたらと思います。

――ヴェルディの音楽の特徴をどんなところに感じますか。

まるで手回しオルガンがずっと回っているような感覚の音楽のような気がします。イタリア人のイントネーションがそのまま音楽になり、喋るように歌うし、歌うように喋る。今回は指揮者と演出家がイタリア人なので、イタリア語には厳しいかなと思いながらも楽しみにしています。毎日乗る阪堺電車では、結構イタリア人が乗っているんですよ。見かけたら嬉しくて話しかけたり、道案内をしたりすることもあります（笑）

片桐 直樹

スパラフチーレ役（21日）

オペラの醍醐味は、登場人物とそれを演じる歌手との合体

――子ども時代は、どんな少年でしたか。歌との出会いは、いつ頃からでしょうか。

一言でいうと、真面目ですね。母は専業主婦で、父が京都市交響楽団のヴィオラ奏者で、ピアノは5歳から習っていました。文句ひとつ言わず、嫌だった練習を仕方なくやらされていたという感じですね。高校1年生の時、合唱部から「コンクールに出場するのに男子が足りない」と引き抜かれたんですよ。楽しくてね、そのまま合唱部に入りました。

――大学でオペラとの出会いが待ち受けていたのですね。

教育大学のオペラの授業で、最初はピアノ伴奏していたのですが、歌っている先輩たちが楽しそうやなと思ったのが、歌に転向するきっかけでした。身体を動かして演技をすることが、最初から楽しくて仕方がなかったです。

――殺し屋・スパラフチーレは、現実にはあまり存在しないキャラクターです。役作りはどのように工夫されるのですか。

若い頃から映画が好きで、大学生の時も映画館まで行って、年間100本ほど観ていました。いろんな役柄がどういう風に動くか、目線や仕草など自然と引き出しが増えるんですよね。今、パッと思い浮かんだイメージは、萬屋錦之助演じる『子連れ狼』で、お金で刺客の仕事をするけれども、ある場面でチラッと人間味が出たりするんですよ。

――楽しみにされていることを教えてください。

オペラの醍醐味は、登場人物とそれを演じている歌手との二つのキャラクターの融合だと思っています。片桐直樹という人格や人生を合体させて、初めて他にない“スパラフチーレ”が出来あがる。お客様に、そういう化学反応を楽しんでいただければ嬉しいです。

（インタビュー：金子真由）

Concert Review

コンサートレビュー

関西二期会 第91回オペラ公演『フィガロの結婚』

今回の『フィガロの結婚』は、古典の中の古典にふさわしく、明快な演出により、実にオーソドックスな好上演となった。

まず、各人の部屋を描く回り舞台が、登場人物の性格や心情を巧みに暗示する。引っ越したばかりの雑然としたフィガロの部屋は、些事にこだわらない明るい市井の夫婦にふさわしいものであり、肖像画がべたべたと貼られた伯爵の部屋からは、いかにも見栄っ張りで悪趣味な俗っぽさが見てとれる。そして伯爵夫人の部屋には最低限のものしかなく、それが夫人の孤独感、冷え切った夫婦仲を象徴しているようだ。第四幕は夜の庭で演じられるため、開放的ではあるものの閉鎖的な印象も残る。最後に夜明けが来るにいたって初めて舞台が完全に開放され、原作の題名にある「狂おしき一日」の通り、この物語がたった一昼夜の出来事であったということにあらためて気づかされるのである。

『フィガロの結婚』10/27公演　撮影：早川嘉雄

歌手陣も皆見事だった。老練な策略家というよりは若々しくさわやかな声のフィガロ、かわいらしくも力強く突き通る声で最高パートを担ったスザンナ、その身分にふさわしい美しく気品のある声の伯爵夫人、そして伯爵は堂々として落ち着いた声と貴族らしい威厳に満ちた態度で、舞台をぐっと引き締めていた。歌唱至難なために滅多に歌われることのないマルチェリーナのアリアも、メゾソプラノらしい力強い声と見事な技巧で客席を魅了した。合唱団も、あえて欧米の舞曲の伝統とかけ離れた土俗的な踊りによって民衆の喜びを力強く直截的に表現しており、とても効果的であった。

そして、この公演を成功に導いた一番の立役者は、なんといっても指揮のグイード・マリア・グイーダ氏であろう。氏は本場ならではの鍛え抜かれた職人芸、最小限の簡潔な指示で、オーケストラやアンサンブルから最良の響きを引き出すことに成功していた。ソリストたちの生き生きとした歌唱も、あるいは氏の見事な指揮に触発されて一層輝いたのかもしれない。

（10月26日鑑賞：北川 順一）

『フィガロの結婚』10/26公演　撮影：早川嘉雄

2019年10月26日（土）、27日（日）

兵庫県立芸術文化センター KOBELCO大ホール

指揮：Guido Maria Guida（グイード・マリア・グイーダ）
演出：太田麻衣子
管弦楽：関西フィルハーモニー管弦楽団

谷やんの
企画・制作デイリーライフ

⑪カラスが『パプリカ』を歌う？

あの美空ひばりさんが新曲を歌う。大晦日 NHK にチャンネルを合わせた。恒例の紅白歌合戦だ。昭和を代表する国民的スターが没して３０年。同時代を生きた、おそらく全ての人の記憶に留まる日本の歌姫の歌声と姿を蘇らせた。それは「またも」と言うべきか、今、社会を大きく変えつつある人工知能（AI）の力。

上質の炭焼きコーヒーを思わせる、豊かな苦みを伴う低音と唸り。時に乙女の声のような、清涼な高音。笙のごとく空間を満たす裏声。変幻自在のビブラート…。秋元康氏作詞の新曲「あれから」を歌う声はどこをとっても、殆ど往年の歌声そのものだった。聴衆を慈愛に満ちた表情で、また辺りを払う女帝さながらに見回す姿は極めてリアル。もともと現世に居ない、ボーカロイドの祖・初音ミクよりも現実的な幻想だった。

ただ白いドレスにはヒトの足を思わせる動きがあまり感じられず、「彼女」の存在に圧倒されながら、「見てはいけないもの」に指の隙間からの視線で触れるような背徳的な浮遊感と、儚さと表裏一体の或る薄気味悪さと。ホラーとファンタジーのはざま、背中合わせの感動にしばらくスッポリ包まれていたのである。

無理もない。故人が生前と変わらない風姿で、新作を歌う。美しさ、懐かしさへの驚嘆や神々しさと「彼女は黄泉で生きていた」という妄想とが、ないまぜの感懐。往来の死生観が困ってる。あらら涙が流れてしまった。在り得ない驚天動地の、科学とアートの混淆する沸騰的な新表現を、目の当たりにし茫然とした。

蘇生劇を自ら仕掛け、同時に工程を追った NHK 総合テレビのドキュメンタリー「よみがえる美空ひばり」によれば、プロジェクトは約一年がかりで進められた。プロデューサーの秋元康氏はじめ、AI プログラマー、CG（コンピュータグラフィクス）、３Ｄ立体映像投影の専門家のほか、ひばりさんの衣装を担ったデザイナー森英恵さん、ひばりさんに心酔する歌手天童よしみさん、ご子息やファンら多くの人々が「もう一度会いたい」一心で協力。各々が持つ知見のエッセンスがデータとして AI へ注がれ、「本人らしさ」を最大限施すためにその特殊機能「ディープラーニング（深層学習）」が駆使された。

そこでは、ひばりさん独特の音程操作やビブラート、楽譜と異なる歌い出し時機の精妙なずらし、倍音を効かす声帯活用などが科学的に解明され、数値化された。それを基に AI が作る音声データを、更に人間が調整を続ける。生まれた表現は、もはや人類史に無いもの。人間と AI が協働する「人電協創」「人愛（ヒト・AI）共創」といった、画期的なクリエーションといえる。

紅白を挟む年末年始、各地のシネコンでは、これまた国民的スターだった「寅さん」こと渥美清さんを銀幕に蘇らせる映画「男はつらいよ 50 お帰り寅さん」が話題を集めた。歌手ひばりさんとほぼ同時代を生きた寅さんも、亡くなってほぼ四半世紀。50 年前スタートした、この名シリーズのサワリを繋ぎ、「さくら」役の倍賞千恵子を筆頭に前田吟、吉岡秀隆、後藤久美子ら、常連の現役名優が新たな物語を演じる。レトロ

イラスト：ささきちみ

スペクティブ（回顧的・懐古的）を基礎に置きながら、旧作の場面を新しいシナリオに活かす表現だった。要所に CG を駆使した画面は、寅さんとの「再会」を望む人々のニーズに応えたものと思われ、「ＡＩひばり」との共通点も感じた。これもまた、テクノロジーが切り拓いた領域である。

テクノロジーはもう、芸術や芸能の世界に踏み込んでいる。米国では、マリア・カラスの立体映像を駆使した演劇事業が行われているそうだ。故人や遺族の心情や権利に配慮する、新たな思考・新たな法制の整備も課題になってくるだろうが、ひばりさんの例に倣えば、マリア・カラスに新作オペラのみならず、フーリンの「パプリカ」を歌わせることも、技術的には可能だろう。往年の名手が永く活躍できる時代、今を生きる音楽家の存在意義は、果たしていったい、何か？

（谷本 裕＝沖縄県立芸術大学教授、関西二期会顧問）

オペラ座の凡人

～平凡人の歌劇な随想

その42「言葉で聴く音」

はるかな時代から、どんなに孤独な芸術家にも、必ず相棒がいた。

画家は絵の具に絵筆、音楽家なら徹底的に錬磨した声や楽器など、たいていの芸術家は、それぞれの芸術に特有の道具や素材を駆使して芸術活動を続けてきた。日常から離れ、芸術に特化した相棒だ。

しかし、ああ！何という不公平。詩人と作家だけは、近所の３歳児が泣きながら口にするのと同じ、あるいは兵舎や工事現場から聞こえてくる荒々しい指示命令の言葉とも同じ、世間の日常生活に浸りきり、擦り減ってしまった「普通の言葉」に寄り掛かって、詩情の森から詩興の空へと、魂を飛ばさねばならない。それは火花飛び散る超高温の作業場で働く汗まみれの男に「君の孤独で寒い日々を温めてあげよう」と囁くにも似ている。詩の本性は、そんなふうにも、こっぱずかしい。

それだから、不思議なことに詩歌は、そして名文句や名台詞を満載した劇場の名作台本たちは、人々の日常に浸透してきた。洋の東西を問わず、名文句が日常会話の中に引用されるのは「言葉の魔力」の証明にもなる。

「月も朧（おぼろ）に白魚のォ、篝（かがり）も霞む春の空」「思いがけなく手に入る百両」「こいつぁ春から縁起が良いわえ」（いずれも《三人吉三廓初買》から）

意味不明でもリズムの小気味よさで聴かせてしまう。言葉の魔力には、存在しない音を聴く力もある。緊張感や情感を研ぎ澄ます効果は鮮やかだ。　例えば「しんしんと雪が降る」。この「しんしん」は音にならない気配を言葉にしている。舞台なら、低い太鼓の音を♩＝120前後のテンポで♩♩♩♩/♩♩♩♩…と、mfくらいで打ってゆくのだった。すると不思議や不思議、綿をちぎって投げるような雪が、音もなく降り積もっている様子が浮かんでくる。まさに「しんしん」。人が抱き合うときは「ひしっ」、急げば「せかせか」、つかめば「むんず」と、無音の音を言葉にする。

それなら、「音のない音」を集めた歌詞でオペラ台本は執筆可能か？

と考えるのは楽しいけれど、遠くにあるとばかり思っていた先約別件の締め切りが、気が付くと眼の前、しかも生きているように近づいてくる。それは例えば「ジリッ、ジリッ」と迫りくる音なき音だったり「ひしひし」と寄せくる緊迫した空気の音だったり…。

この恐怖から逃れるには、「せっせ」と執筆するのみ。楽しい構想は、そのあとで。

（作家・音楽評論家：響　敏也）

公益社団法人関西二期会賛助会　入会のお願い

関西二期会は、オペラを中心とした音楽活動及び真摯な芸術活動を通じ、
社会に夢や潤いを与え続けます。関西二期会の活動にご賛同いただける皆様に、
法人・個人を問わず、何卒賛助会員としてご入会下さいますようお願い申し上げます。

賛助会員ご芳名

特別会員　：　上野製薬株式会社

あいおいニッセイ同和損害保険株式会社
株式会社淺沼組
荒川化学工業株式会社
稲畑産業株式会社
株式会社エフエム大阪
株式会社大阪共立
大阪シティ信用金庫
公益財団法人オリックス宮内財団
京セラ株式会社
倉敷紡績株式会社
鴻池運輸株式会社
学校法人神戸女学院
コーナン建設株式会社
サラヤ株式会社
サントリーホールディングス株式会社
三宝電機株式会社
株式会社滋慶
住友電気工業株式会社
ダイキン工業株式会社
大日本除虫菊株式会社
タカラベルモント株式会社
株式会社竹中工務店
株式会社帝国ホテル
株式会社テクノーブル
東京衣裳株式会社
医療法人二村耳鼻咽喉科ボイスクリニック
株式会社ハートス
阪急電鉄株式会社
富士有限会社
株式会社丸善
ミズノ株式会社
株式会社美々卯
学校法人武庫川女子大学音楽学部
森下仁丹株式会社
株式会社モリタ
株式会社ユニオン
ロイヤルステージ株式会社
（他、匿名１社）

芦原　恭子
我孫子　昌三
石塚　克哉
伊藤　勲
岩佐　益男
江崎　正道
岡田　晴美
岡本　俊久
門屋　淳子
川田　達男
北嶋　勇志
蔵田　由美子
黒田　まさき
小谷　公穂
小八木　規之
佐野　吉彦
佐守　友博
杉野　守彦
辰野　勇
田中　昭子
田中　義雄
藤堂　稔之
中村　雅夫
西田　俊夫
仁禮　直之
長谷川　弘
林　律
早嶋　茂
樋口　信治
藤友　俊雄
水越　浩士
山口　久仁子
山口　博子
山口　眞子
（令和２年２月１日現在）

受賞のお知らせ

理事 片桐直樹

第 38 回（令和元年度）京都府文化賞（功労賞）を受賞。
これまでに数々のオペラに出演し、100 に及ぶ役を演じる。端正な音楽性と存在感のある多彩な役作りに定評がある。またオラトリオ、宗教曲等のソリストとして著名指揮者やオーケストラとの共演も多く、バロックから現代曲に至るまで幅広く活躍していることが評価された。

新入会員の紹介

出立 和子 *Kazuko Detachi*（ソプラノ準会員）

武庫川女子大学音楽学部声楽学科卒業、相愛大学音楽専攻科卒業、2015 年ブルガリアにて G. サッバティーニ氏のマスターコースを受講、ディプロマを授与。2016 年相愛大学オペラ公演「コジ・ファン・トゥッテ」フィオルディリージ役で出演。2017 年相愛オーケストラと共演。泉功子、泉貴子、山田健司の各氏に師事。

名古屋二期会より移籍

山口 エリカ *Erika Yamaguchi*（ソプラノ準会員）

堺市出身。大阪音楽大学音楽学部声楽専攻卒業。
芝田眞理、夏目久子、の各氏に師事。
音楽の専門学校等で歌唱指導などを担当。
名古屋二期会フレッシュコンサート、各種コンサートに出演。観客層に応じたコンサートに多数出演、特に童謡曲をメインとした町屋コンサートは好評だった。奈良県音楽芸術協会会員。

スケジュール 2020

（主催公演、依頼を受けて当会会員が出演する公演、当会が後援する公演）

2 February

22 日（土）16：00，23 日（日）14：00
第 92 回オペラ公演
『カヴァレリア・ルスティカーナ』『パリアッチ（道化師）』
東大阪市文化創造館　Dream House 大ホール
22 日出演：古田昌子 / チョン・キヒョン / 森理奈 / 大谷圭介. / 奥田敏子
山中雅博 / 福田祥子 / 米田哲二 / 藤田大輔 / 鳥山浩詩
23 日出演：福原寿美枝 / 瀬田雅巳 / 名島嘉津栄 / 片桐直樹 / 田村香絵子
小餅谷哲男 / 森井美貴 / 東平聞 / 西口佳宏 / 山咲響

22 日（土）14：00　東京シティ・フィルハーモニック管弦楽団
第 331 回定期演奏会『ミサ・ソレムニス』
東京オペラシティ コンサートホール　出演：二塚直紀

28 日（金）18：30
新進芸術家育成プロジェクト・リサイタルシリーズ Vol.34
西尾岳史バリトンリサイタル
兵庫県民会館 けんみんホール　出演：西尾岳史

28 日（金）19：00　ベイコム演奏会 2020
あましんアルカイックホール　出演：四方典子 / 大谷圭介.

3 March

7 日（土）　京都先端科学大学卒業式　出演：森井美貴 / しまふく羊太

8 日（日）17：00　吹田市民の第九 2020
千里金蘭大学佐藤記念講堂　出演：長谷川明莉 / 鳥山浩詩

27 日（金）片桐仁美・堅田京子ジョイントリサイタル
ザ・フェニックスホール　出演：片桐仁美

28 日（土）14：00　関西二期会オペラ研修所第 55 期生終了オペラ公演
ピッコロシアター 大ホール　出演：関西二期会オペラ研修所第 55 期生・56 期生

4 April

17 日（金）19：00
フランスの声 Série II 5　Musicien Charmé ～魅せられた音学家～
兵庫県立芸術文化センター 神戸女学院小ホール
出演：浅井順子 / 安部俐希 / 加田真紀子 / 粉川陽子 / 志水祐子 / 末廣亜矢子 / 田中茜 / 野村明代 / 福原亜季 / 南出真美 / 田中秀明 / 山﨑覚 / 福田清美（公演監督）

25 日（土）19：00　大谷圭介 . バリトンリサイタル
京都府民ホール アルティ　出演：大谷圭介. / 周防彩子 / 森川華世

5 May

2 日（土）14：00　関西二期会オペラコーラスシンガーズ
第 10 回演奏会「愛の妙薬」ハイライト
大阪市立阿倍野区民センター 小ホール
出演：福永修子 / 根木滋 / 油井宏隆 / 服部英生 / 松尾知佳 / 細田隆（指揮・指導）

6 日（水）14：00　おぺらの音楽会⑧「ヘンゼルとグレーテル」
ピフレホール　出演：山口貢三子 / 田中崇由希 / 山口慧 / 尾崎あや子 / 馬場清孝

16 日（土）　ならムジークフェストオープニングイベント
東大寺大仏殿　出演：北野加織

27 日（水）19：00　ドイツ歌曲の流れ　Vol.31 ～恋歌～
兵庫県立芸術文化センター 神戸女学院小ホール
出演：苅田夏子 / 粉川陽子 / 畑田弘美 / 山下春菜 / やまだちひろ / 山本伸子 / 大垣加代子 / 児玉祐子 / 清水かをり / 古田昌子 / 山本歩 / 横山琴音 / 萬田一樹 / 三井ツヤ子（公演監督）

30 日（土）14：00　第 58 回大阪国際フェスティバル 2020
関西フィルハーモニー管弦楽団創立 50 周年記念
飯守泰次郎 × 関西フィル　ワーグナー作曲
楽劇「ニーベルングの指環」ハイライト（演奏会形式）
フェスティバルホール　出演：白石優子 / 福原寿美枝

31 日（日）14：00　板井美知ソプラノリサイタル Vol.3
神戸市東灘区民センター うらはホール　出演：板井美知 / 蓼原道子（演出）

6 June

5 日（金）19：00
2020 想い出のあの歌　～ハーモニーの宝箱をあなたに～
住友生命いずみホール
出演：安部俐希 / 川中恵子 / 津田基子 / 桐山由香 / 山本かおり / 篠原美幸 / 田井美佐緒 / 西垣千賀子 / 畑田弘美 / 水野昌代 / 髙木華奈 / 山本海花 / 西田想人美 / 松井るみ / 藤原道代 / 大河寿美子 / 馬場恵子 / 松永麻美 / 阪上真知子 / 井上結衣 / 沼田葉子 / 藤井零士 / 神田裕史 / 根木滋

9 日（火）19：00　西田真由子・中川正崇デュオリサイタル
豊中文化芸術センター 小ホール　出演：西田真由子

19 日（金）18：45，20 日（土）16：00
名古屋フィルハーモニー交響楽団
第 480 回定期演奏会「ミサ・ソレムニス」
愛知県芸術劇場コンサートホール　出演：福原寿美枝

20 日（土）16：00，21 日（日）14：00
第 93 回オペラ公演『リゴレット』
東大阪市文化創造館　Dream House 大ホール
20 日出演：大谷圭介. / 周防彩子 / 瀬田雅巳 / 萬田一樹 / 古田昌子 / 萩原泰介 / 髙岡友美 / 鳥山浩詩 / 藤田大輔 / 近藤修平（客演）/ 森井美貴 / 服部英生 / 味岡真紀子
21 日出演：細川勝 / 松浦優 / 馬場清孝 / 片桐直樹 / 井上美和 / 伊藤正 / 岸畑真由子 / 谷本尚隆 / しまふく羊太 / 中野嘉章 / 立塚夢子 / 神田行雄 / 近藤麻帆

KANSAI NIKIKAI OPERA
発行：公益社団法人 関西二期会　〒540-0026　大阪市中央区内本町 2-3-11　内本町グリーンビル 601　TEL.06-6360-4649　E-mail. kansai-nikikai@pop17.odn.ne.jp
編集長：金子真由　責任者：堀田栄作
企画・制作：(株)サンワイズ・コミュニケーション